

論文の要旨

氏名：林 直 樹

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：東京東北部を中心とした首都圏東部域音調の多角的研究

本研究の目的は、東京東北部を中心とした首都圏東部域で行った 2 種類の面接調査データを用いて東京東北部・首都圏東部域における音調実態を把握し、音調変化傾向の解明、ならびに音調の「あいまい性」・「明瞭性」の関係性を考察することである。本論文で取り組む課題は、大きく以下の 3 点となる。

- [1]東京東北部・首都圏東部域を中心とした地域アクセントの実態把握
- [2]アクセントの「あいまい性」・「明瞭性」を解明するための音響分析手法の確立、ならびに同手法による分析
- [3]客観的手法によるあいまいアクセント・明瞭アクセントの分類とその関係性の考察

本研究で主たる調査対象となる東京東北部は、金田一春彦（1942；1948）において「埼玉特殊アクセント」や「あいまいアクセント」地域であることが指摘され、1970－80 年代を中心にその実態解明のための調査がなされてきた。とくに、埼玉特殊アクセントは「日本諸方言アクセントの一種として、一つの重要な位置を占めている（大橋純一，1996：90）」と、その特殊性や重要性が研究者間でも認識され、音調実態の解明や、共通語化といった変化動態の把握がなされてきた。しかし、これらの調査・研究の中心となってきたのは、典型的な地域として指摘された蓮田・久喜といった埼玉東部地域であり、かつ、東京東北部を対象とした調査・研究は 1980 年代以降なされずにいた。そのため、当該地域に出現する埼玉特殊アクセントの実態や、30 年近く経過した現況については、未解明の部分が多かった。

また、これまでの研究においては、「聞き取りが困難」「微妙な高低差」などの指摘がある当該地域の音声的特徴について、客観的・定量的な把握が十分なされなかった。

このような背景を持つ東京東北部・首都圏東部域の音調に注目し、研究を行うことは、首都圏広域におけるアクセントの実態把握、ならびにあいまいアクセント・無アクセントといった全国に広がる不明瞭なアクセントのあいまい性解明に繋がると考えられる。また、当該地域アクセントの変化をたどることで、明瞭⇔あいまい⇔不明瞭といったアクセント変化を動的に捉える手がかりを得られる。

本論文は序章・終章をおく 2 部・7 章構成となっている。各章の概要は以下のとおり。

序章においては、論文全体の概説を行うとともに、本研究で主たる分析対象となるあいまいアクセント・特殊アクセント研究の整理、東京東北部・首都圏東部域アクセントの特徴記述を行った。ここでは、無アクセント・一型アクセントといった他の不明瞭なアクセントに比べて、あいまいアクセント・特殊アクセントはその実態が解明されていないことや、東京東北部・首都圏東部域といった地域が、あいまいアクセント・特殊アクセント研究においてあまり取り上げられなかったことを述べ、本研究の位置づけを示した。

本論の第 1 部では、東京東北部アクセントの実態調査と位置づけ、2010 年に行った東京東北部アクセント調査の結果を用いて、東京東北部におけるアクセントの実態を詳細に分析・報告した。

第 1 章では、埼玉特殊アクセントとの連続性が指摘されている東京東北部アクセントの実態を明らかにするため、当該地域生育者 87 名分のリスト読み上げ式データを用いて分析を行った。

当該地域アクセントの 1) 音調実態、2) 年層差、3) 地域差の 3 つの観点から分析を試みたところ、東

京東北部全体は共通語化・東京中心部化しつつも、埼玉特殊アクセントの特徴である「型のゆれ」や「IVV類尾高型」がとくに高年層に残存する傾向にあることがわかった。以上の結果から、[1] 埼玉特殊アクセント的なあいまいアクセントから東京中心部的な明瞭アクセントへの変化は「同一語ゆれ」「形式ゆれ」の消失プロセスとして説明できること、[2] 地理的分布の非連続性は鉄道網の開設時期という都市化の観点から説明できることを指摘した。

第2章では、当該地域高年層にみられる音調型をさらに詳しく検討するため、東京東北部高年層44人分のアクセントデータのうち、2拍名詞の単語単独・短文に現れる音調型と型のゆれの実態報告を行った。

出現する音調型・型のゆれを分析した結果、2拍名詞については、当該地域に分布するあいまいアクセントにおいて“文節末-2型”という基本アクセントの影響が存在する可能性を指摘した。また、埼玉特殊アクセントの特徴が現れる地域の中にも、タイプの異なるアクセントが確認された。埼玉特殊アクセントの特徴が出現しない地域では、東京中心部における新型の獲得がみられることについても言及した。

第3章では、第1章・第2章で分析した結果や指標に基づき、多変量解析のひとつであるクラスター分析による分類を行い、当該地域音調の分布状況や変化プロセスの考察を行った。

分析の結果、当該地域アクセントは「埼玉特殊アクセントの話者群」「準埼玉特殊アクセントの話者群」「準共通語・東京中心部アクセントの話者群」「共通語・東京中心部アクセントの話者群」の4群に分類された。また、それぞれの群を分化する特徴として、1) IVV類短文において、-2型という地域アクセントを特徴付ける音調型が共通語・東京中心部アクセントと同型の1型に変化すること、2) 型意識の非明瞭さを表す形式ゆれが消失すること、以上2点が重要であることを指摘し、埼玉特殊アクセントから共通語・東京中心部アクセントへの変化プロセスを推定した。

続く第2部では、首都圏東部域にみられる「あいまい性」・「明瞭性」の解明と位置づけ、2013年4月-2014年8月にかけて行った首都圏東部域広域を対象とした調査データを用い、客観的・音響的手法に基づく当該地域アクセントの分析を行った。

まず、第1章では、首都圏東部域アクセントにおける「あいまい性」を客観的に捉えることを目的とした音響的指標の検討を行った。ここでアクセントの「あいまい性」を捉えるための指標としたのは、「下降幅」「相対ピーク位置」の2種である。下降幅は下がり目の有無、相対ピーク位置は下がり目の位置に関連する特徴であり、これにより当該地域アクセントの微妙な高低差や、聞き取りの困難さの要因とみられる微妙な下がり目の位置が量的に捉えられるようになった。これらの指標を算出するためのデータ構築方法と音声データへのタグ付け方法も記述し、本分析で扱うデータ全体の傾向も指摘した。

第2章では、下降幅と相対ピーク位置の2指標を用いて、当該地域話者の音響的特徴を地域別・個人別に分析した。本章では首都圏東部域話者と東京中心部話者における音響的指標の出現傾向を対照的にみることで、音響的指標からみたアクセントの「あいまい性」・「明瞭性」の関係性を明らかにした。

分析の結果、首都圏東部域話者は、東京中心部の話者よりも下降幅が小さく、相対ピーク位置が語ごとにあまり区別されておらず、不安定であることが確認された。話者ごとの指標出現傾向も分析し、当該地域にみられるあいまいアクセントは、3つのタイプに細分化して特徴を記述できることを示した。

第3章では、第2章で分析した音響的指標を用い、「型区別」と「ゆれ」といった観点から当該地域アクセントの把握を試みた。とくにここで指標とするのは「語間距離」「語内距離」という2種類の“距離”である。

本指標の出現傾向を分析した結果、語間距離のうち、東京中心部話者の下降幅は値が大きく、首都圏東部域話者よりも明瞭に語の区別がなされているような傾向がみられた。相対ピーク位置は東京中心部話者でも個人差が大きく、首都圏東部域話者に比べて距離が大きく離れているわけではないことがわかった。

語内距離においては、個人差の大きさが確認されたが、尾高型相当語の相対ピーク位置は、首都圏東部域話者の方が大きいことが確認された。

最後に、これらの特徴を総合的に把握するため、「型別面積」「統合語内距離」という指標を導入し、統合的な分析を行った。その結果、首都圏東部域話者は型別面積が小さいため、型別があいまいとみられることに加えて、統合語内距離の個人差、すなわち個人間のゆれの度合いが激しいことがわかった。これらの結果から、当該地域アクセントの特徴である「変化の急速さ」は、「個人差の大きさ」が当該地域における変化とみなされたことが一因である可能性を述べた。

第4章では、第2部で取り上げた音響的指標を変数とし、多変量解析の一種であるクラスター分析による首都圏東部域・東京中心部アクセントの話者分類と、当該地域アクセントタイプの推測を試みた。クラスター分析の結果、当該地域アクセントは大きく「明瞭群」「不明瞭群」「不明瞭・未区分群」の3群に分類され、「明瞭群」とその他の群との間では下降幅が、「不明瞭・未区分群」とその他の群との間では相対ピーク位置が顕著に異なることがわかった。そして、ここで得られた分類に基づき、先行研究で指摘されている分類との比較・地理的分布傾向の把握などを行い、本分析が当該地域アクセントの「あいまい性」を詳細に捉えていることを指摘した。さらに、当該地域アクセントのあいまい性は、下がり目の幅と下がり目の位置により多層的・複線的に捉えられることを論じた。

終章では、第1部・第2部の結果を受け、ここまで言及してきたアクセントの「あいまい性」・「明瞭性」の関係性を総合的に考察し、アクセントの「あいまい性」・「明瞭性」はアクセントの下がり目の幅の「明瞭性」と、下がり目の位置の「区分性」という連続する特徴により、適切に捉えられると結論付けた。また、本論文によって得られた知見を元に、一型アクセント・無アクセントといった、その他の不明瞭アクセントの位置づけも行い、今後の課題を述べた。

以上